鴻巣南中学校講演　関係資料およびプレゼン原稿

2022.6.23

コスモ・クリエイター・ジャパン株式会社
藤生崇則

日程：2022 年 6 月 23 日（木）13:50～14：40
教科：進路学習
生徒：中学 2 年生 82 名

【概要】
演題「外の世界を知ろう。多足のわらじのすゝめ」

（内容）
この講演では、私の経験してきた仕事やボランティアについてお話ししたいと思います。その時々のやりがいや苦労、考えたことなどを話しますので、それが皆さんの進路選択、ひいては自分で自分の人生を創っていく際の一助となれば幸いです。
私は大学院を卒業した後、24 歳の時に NTT に就職しましたが、40 歳の時に福祉ベンチャー企業に転職しました。その後、NPO や病院に勤め、50 歳の時に起業し、今は社長をやっています。
NTT を退職するときは本社の担当課長で、年収は約 1 千万円でした。そこから転職した福祉ベンチャー企業は有限会社で、年収は 300 万円ぐらいになりました。しかし、NTT にいた時よりもやりがいがありました。
その一方で、ボランティア活動もしてきました。市民国際交流、海外の幼稚園寄付、心のケア、難病の子どものサポート、訪日外国人サポート、震災ボランティア、オリンピックボランティアなどいろいろやってきました。
どのボランティア活動も思い出があり、いろいろな出会いや学びや成長があり、楽しい体験でした。
そして今、起業した会社は「終末期等の人の心残りを解消するためのサービス提供」をしています。
これまでボランティアでやってきたような活動を仕事としてやっています。
どうしてここまで来たのか、皆さんにお話ししていきたいと思います。

（参考）
講演者に関する動画
●日米ソ市民国際交流ボランティア
（ProjectRAFT1991：米ソ冷戦下、呉越同舟で激流下り）
https://youtu.be/-woM3sZoo6o
●メイク・ア・ウィッシュボランティア
（難病の子供の夢をかなえるお手伝い）
https://youtu.be/hgFHTsVdsxI
●夢活事業プレゼン
（起業した会社の事業概要）
https://youtu.be/hPKR6VV09-o

【全体の流れ】

序幕　外の世界とは

外の世界とは外国ではない。所属グループのこと

わらじとは二足のわらじのこと。

私のこれまでの仕事＆ボランティア体験・・・多足のわらじ

第 1 幕　仕事人間を辞めました

採用はエリートコース

開発部で「仕事できない」に。

エリート採用なのに・・。

自己探求

ひらめいた言葉「**自分で選択**」。

仕事以外のこともやっていいと思えるようになった

ボランティア活動（プロジェクト・ラフト、スリランカでの幼稚園建設、メイク・ア・ウィッシュ・・・）

第 2 幕　NTT を辞めました

NTT コミュニケーションズで「仕事できない」「お客様の喜ぶ顔が見えない」

これまでボランティアやグループ会社で活躍してきたのに・・。

言葉を得た「**私の発明で人を幸せにする。それが私の人生だ**」

NTT から福祉ベンチャー企業へ。

お客様の顔が見える幸せ。力発揮。テレビ出演も。

第 3 幕　サラリーマンを辞めました

NHK のドキュメント番組→こういう看護師さんたちがいなかったら夢はかなわない

→そういうサービス業があればいい→あるのか？なければ自分が作るか？

七夕の短冊に

メイク・ア・ウィッシュとの出会い。心残りの解消をお手伝いすること自体は可能。

50 歳手前で「**1 粒で 2 度おいしい**」

母の言葉「**私が死んでからにしておくれ**」→びびっていったん諦めた。

1 年間、母の話を聴き続けた

母「**やっぱりお父さんの血を引いているのね‥。**」

→起業「**終末期等の人の心残りを解消するお手伝い**」をする会社

第 4 幕　現在の仕事

終活コンサルだけではやっていけない。　プログラミング講師も
自分の会社なので、時間自由。オリンピックボランティアも
最近の成果　「素敵な人」
作者の遺志。遺族が受け継いでいる
こんな素敵な人（社会貢献している人）がいることを、多くの人に知ってほしい
最近話題に上るサーロー節子さんとか、知ってほしい。

終幕　まとめ
最初に戻って、「外の世界を知ろう。多足のわらじのすゝめ」
価値観の違う世界を知り、体験し、選択肢を増やす
そして、自分で選択する。

（参考）使用しているプレゼンテクニック（できなかったのもあり）

・これ、こんなに面白いんだよ～！の雰囲気・観点で。情熱的。前のめり。
・ゆっくり。早口厳禁。自分は活舌が悪いのを意識すること。
・最初および途中で手を挙げさせる（能動的に体を動かす）ような質問をわざとする。
・新庄式をやってみる
　インパクトのある**キーワード**を提示する
　～じゃあないんです！～なん**です！**（Not-But）
　～じゃね？**～と思いませんか？**（共感）
・何か起こる　→　それに一生懸命対処　→　人生が開ける、のパターンで。その何か、とは
　問題が起こる（「ところが、**ここで問題がありました。それは･･･**」）
　気付く、言葉を思い付く（「この時、**ある時言葉が思い浮かびました。それは･･**」
　来る、出会う（「その時、**運命を変える出会いがありました。それは･･･**」）
・ビフォー／アフターを並べて示す。差異（効果）を明示する。
・当日質問を受けたら、それを簡潔にまとめて言ってから、答を言うようにする（録音事情を考慮。会場の質問者の声は録音できていないことが多々あるので）→今回は質問者もマイクを使うので、大丈夫だった。

【トーク】
（下記は講演前に予定していたものであり、当日実際に話した内容とは異なる）

序幕　外の世界とは

コスモ・クリエイター・ジャパン株式会社の藤生と申します。
私は鴻巣生まれで、仕事で横浜とか仙台に住んだこともありますが、今はまた鴻巣に住んでいます。
これから、「外の世界を知ろう。多足のわらじのすゝめ」ということでお話しさせていただきたいと思います。
（■スライド：「外の世界を知ろう。多足のわらじのすゝめ」）

ところでこの冊子はお手元にありますね？なければ手を挙げてください。大丈夫ですね。
この冊子については、またあとでお話しします。

ここで皆さんにちょっと皆さんに聞いてみたいのですが、演題が「外の世界を知ろう。多足のわらじのすゝめ」というのを見た時に、わらじを履いて外国を旅しましょう、という話だと思った人、どのくらい言いますか？（手を挙げさせる）
（■スライド：地球儀とわらじ）

さすがにいませんね。そう、／お、何人かいますね。残念でした。
それじゃぁないんです。
（■スライド：先程のスライドに大きな赤いバツ印）

ここでいう「世界」とは日本とか外国といった場所のことではありません
じゃあ何かというと、「世界」とは自分が属しているグループのこと**です。**
そして「外の世界」とは、自分が属しているグループとは違うグループがあって、そこでは常識やものの考え方が異なっている、という話です。
その、異なる常識やものの考え方を積極的に、意識して知っていこう、という話です。

事前の問いかけにも挙げさせてもらいましたが、皆さんも学校というグループに属していますよね。それ以外に、家庭というグループにも属していますよね。他には、部活とか、塾とか、スポーツクラブとか、もしくは地域の子供会とか教会、それにネットのグループに属している人もいますよね。

だから、やったことがないことをしなさい、というのではなく、今までやっていることをもっと積極的に、もっと意識してどんどんやっていきましょう、という話です。

そして、「多足のわらじ」ですが、実際にわらじを履きましょう、というわけ**じゃあないんです。**
みなさん、「二足のわらじを履く」という言葉は知っていますか？それは、2つの仕事をしていることを言います。例えば、サラリーマンをしながら作家もしている人などです。これはサラリーマン用のわらじと作家用のわらじを履いている、ということですね。
ここでは、そんな二足だけでなく、三足、四足、そして多足で行きましょう、という話**です。**

具体的に言えば、私には仕事という世界があり、そこに属しています。
でもそれ以外に、私の場合はボランティアという、仕事とは別の世界でも活動しています。
私も二足のわらじを履いています。それどころか、アルバイトで全く違う仕事をしたり、ボランティアも複数やっているので、二足どころか多足のわらじを履いています。

この講演では、私の経験してきた仕事やボランティアについてお話しすることで、この「外の世界を知ること、多足のわらじを履くこと」がいかに面白くて豊かな人生になるか、を皆さんに伝えたいと思います。
その時々のやりがいや苦労、考えたことなどを話しますので、それが皆さんの進路選択、ひいては自分で自分の人生を創っていく際の一助となれば幸いです。

さて、では最初に私のしてきた仕事の全体をお見せします。
（■スライド：これまで経験してきた仕事とボランティア）

大きく見て、前半はサラリーマン、後半は会社を設立して社長をやっています。
サラリーマンの間にも、前半はNTT、後半はいくつかの会社を経験しています。
また、このＮＴＴ時代にも、いろいろな部署に転勤し、いろいろな経験をしています。

さらに、ボランティアもいろいろやってきました。
この後お話ししますが、ソ連での激流下りでの国際交流や、スリランカの幼稚園建設、難病の子供たちの夢をかなえるお手伝いなどをしてきました。東日本大震災のボランティアや東京オリンピックのボランティアもやりました。
つまり、これだけ多くのわらじを履いてきた、ということです。

さて、では仕事人生のスタート、ＮＴＴに採用されたところからお話しします。

第１幕　仕事人間辞めました

（■スライド：第１幕　仕事人間辞めました）

いきなりこのタイトルですが、順を追ってお話ししていきます。

今から約 40 年前、大学院を卒業して 24 歳の時に、NTT に就社しました。A 採用という採用枠での入社です。総合職採用とも言いますが、これはいわゆるエリートコース、出世コースです。今ではこの制度はもうないのですが、当時はそういうのがありました。これはエスカレーターみたいなもので、大きな失敗をしなければ自動的に出世して、将来は電話局長や事業部長といったところまで行って定年退職、となると言われていました。

そんなところで仕事を始めたのですが、**問題が発生しました。それは、**
（■スライド：仕事ができなかった）　←真っ赤な背景に白い太文字でインパクト重視
できなくて自己嫌悪になりました。

その時、このままずっと定年までこんな気持ちで過ごすのか、と思いました。
自分はエリートコースというエスカレーターに乗っているから、このまま我慢していればそれなりの所には行きつくだろうけど、定年までずっとこんな気持ちで過ごすのか・・とその時は思いました。

それで自分の人生を見つめてみることにしました。自己探求をすることにしました。いったい
キーワード表示：「自分は何なのか」
と。
（■スライド：自己探求　自分は何なのか）

自己実現とか自己啓発とか、いろいろな本を読んだり、社会人向けのセミナーに参加したりしました。
その結果、**ある言葉がひらめきました。それは、**
キーワード表示：「人生を自分で選択しながら生きていこう。自分が選択した結果なら、どこに行きついても満足だ。たとえどっかで野たれ死ぬことになっても。」

です。
（■スライド：思いついた言葉「人生を自分で選択しながら・・」）

これまでの自分はどうだったかというと、
キーワード表示：「幸せになるためにエリートコースのエスカレーターからこぼれ落ちないようにしなければならない。頑張らなければならない。」
と思っていました。何しろ、こぼれ落ちなければ、それなりの所に行き着けることはわかっていましたから。
（■スライド：落ち込ぼれないように頑張る）

でもそれじゃぁないんです。それは幸せ**ではないんです。**
キーワード表示：自分にとっての幸せや満足は、自分で選択し、自分の人生を創ることなん**です。**
（■スライド：人生を自分で選択・・）

そう気が付きました。その結果、エスカレーターの先にあるそれなりの所に行き着かなくてもいいや、と言えるようになりました。
（■スライド：エスカレーターと分岐点選択の小道の図）

それでずいぶん楽になりました。

それでこれはある意味、この時に自分の人生全体を俯瞰した。上から全体を眺めた、とも言えます。

このことを、川と船のイメージでお話ししましょう。
昔の自分は、仕事が全てだと思っていました。
仕事ができなければ人としてダメだと思っていました。
そして仕事をしているこの職場、この会社が世界のすべてであり、世界はこれしかないと思っていました。
（■スライド：地面に「仕事」の円形枠。その中に自分。円形枠あたりにだけ光当たっていて他は暗闇）

ここで生きていくためには、もっともっと頑張らなければならないと思っていました。
仕事以外のことをやってはいけないと思っていました。
仕事以外のことをやっていては、落ちこぼれになる、不幸になると思っていました。
また、仕事以外のことをやるような奴は逃げている、脱落者だ、人間失格だ、恥だと思っ

ていました。
頑張れば褒められる。頑張ってボロボロになればもっと褒められる。ボロボロになっていれば、失敗してもみんなに許してもらえる。そう思っていました。
（しばし間）
ここらへんはみなさん、「仕事」を「勉強」に置き換えて自分のこととして考えてみてくださいね。

しかしある時、私は「人生」という川があることに気が付きました。
その川の上に「仕事」という船が浮かんでいて、自分がその中にいるんだ、ということに気が付きました。
（■スライド：船の周りまで光）

つまり、これまで船の中からしか物事を眺めていなかったのに、そこから出て川の上から全体を俯瞰しました。
これは今までになかった体験です。
（■スライド：船を上から見る構図）

それと同時に、その「人生」という川には、「仕事」以外の船も浮かべられることに気が付きました。私はその川に「ボランティア」という船を浮かべました。
（■スライド：川に浮かんだボランティアの船も）

もし私が「仕事」という船の中にいたままだったら、「仕事」という船の中には他の船を置いておくスペースなどありません。どんなに私が努力しようとも、「ボランティア」という他の船は置けません。置こうと努力しても、窮屈になって、ますます苦しくなるでしょう。まあ、模型の船ぐらいなら置くことができるでしょうが、それは形だけのもので本物ではない、偽物でしょう。

さらに私はこの「ボランティア」という船以外に、「趣味」「自己啓発」「芸術」・・・といった船を浮かべることができました。
（■スライド：川に浮かんだ様々な船）

そしてそれらの船に橋げたを渡して行き来できると同時に、「ボランティア」の船で作ったものを「仕事」の船へ持っていって使うということもできるようになりました。

では、そのように仕事以外のこと、ボランティアができるような自分になって、どのよう

なボランティアをしたかというと、
（■スライド：これまで経験してきた仕事とボランティア・再表示）

●プロジェクト・ラフト
例えば、市民国際交流ボランティアということで、ソ連に行って激流下りをしてきました。
これは 1991 年、私が 28 歳の時です。
当時はロシアではなくソビエト連邦でした。そしてアメリカとソビエトは冷戦をしていました。直接戦争をしてはいませんでしたが、互いに軍事拡大競争をしていました。
そのように国同士が仲が悪かった時に、各国の市民たちは同じ人間として交流しよう、それができることを世界にアピールしよう、というプロジェクトが行われました。それがこのプロジェクト・ラフトです。
最初はアメリカとソ連の市民だけでしたが、1991 年の時は日本・アメリカ・ソ連の市民約 50 名が一週間、キャンプ生活をしながら一緒に川を下りました。12 艇のボート（RAFT）に分乗し、シベリアの川を下りながら、市民同士で平和な交流ができることをアピールしました。
その時のビデオを観てみてください。
（■ビデオ上映：テレビでのインタビュー、激流下り）

（■スライド：ボートに日米ソの旗がある写真）

この写真にもあるように、ボートには日米ソの旗を一緒に掲げていました。
先程のビデオにあったように、激流の渦巻くところではボートに乗っている人たちが協力しあわなければこの激流は乗り切れません。日本人もアメリカ人もソ連人もありません。
まさに「呉越同舟」です。

このプロジェクト・ラフトでは、ボートを地球と見立てて、この時の地球的困難を乗り切るために国の違いにこだわらずみんなで協力しよう、それはできるんだ、ということをアピールしていました。

ちなみにこの後、私たちが日本に帰国した直後にソ連でクーデター騒ぎが起こり、その後ソ連は崩壊し、ロシアになりました。そんな歴史の変わり目にこれをやっていました。

●メイク・ア・ウィッシュ
それから、難病の子供の夢をかなえるお手伝いをする、というボランティアもしました。

難病の子どもの夢というのは、正義のヒーローや憧れの芸能人に会いたいとか、ディズニーランドで遊びたいとかいろいろあります。
私の場合は、日本に来て日本文化を楽しみたいという海外の子供をサポートするというのが多かったです。
（■スライド：海外の子供たちとの写真コラージュ）

もっぱらアニメや漫画の聖地である秋葉原を案内したりしていましたが、時々普通はできない体験をしたこともありました。
例えば和菓子作り体験をサポートした時もありました。その時は雑誌が取材に来ました。
また、浅草で一緒にそばを食べているときに、たまたまテレビに取材されたこともあります。

それと最近、新聞記事にこのメイク・ア・ウィッシュの活動が取り上げられました。私が担当した件ではありませんが、埼玉県の白血病の 12 歳の女の子が絵本を作るのをお手伝いした話です。
（■スライド：新聞記事コラム、絵本表紙）

残念ながらこの子は絵本が完成する前日に亡くなってしまいましたが、この絵本から生きる勇気をもらった子は数十万人にもなるだろうとのことです。

自分の関わっていることがこのようにマスコミなどで取り上げられるのもまた、嬉しいことです。（ここらへんは、後で自分が自分の会社で仕事としてある人の自伝を出版し、それに関連するサーロー節子さんがちょうどマスコミに取り上げられている事の伏線）

●そのほかのボランティア
これ以外にも、いろいろなボランティアや自己研鑽をやりました。
（■スライド：いろいろなボランティアでの写真のコラージュ）

こうやって、仕事だけの人間を辞めて、外の世界、ボランティアの世界にも足を踏み出しました。

●転勤
さて、仕事の方の話に戻りましょう。
NTT にいる間にもいろいろ転勤があって、いろいろな仕事をしてきました。
（■スライド：これまで経験してきた仕事とボランティアの図・再表示）

これらの仕事それぞれいろいろ思ったり悩んだりしたこともあるのですが、今回は時間の関係もあるので省略します。

第 2 幕　　NTT を辞めました

（■スライド：NTT を辞めました）
そしていよいよ、人生初の転職の話です。

●転職：NTT から福祉ベンチャー企業へ
４０歳の時です。転職をしました。ＮＴＴを辞めました。
当時、私は本体である NTT コミュニケーションズの担当課長だったので、年収は約 1 千万円もらっていました。オフィスは東京・新宿のオペラシティにありました。オペラシティは地上 54 階のものすごく高いビルです。オフィスから地上の街並みを見下ろしていました。
（■スライド：オペラシティ外観）

そこから NTT を辞めて、仙台にある福祉ベンチャー企業に転職しました。当時は有限会社で、年収は 300 万円ぐらいになりました。

なぜ NTT を辞めたのか、エリートコースにいて、年収 1 千万円もらっていて、**なんでやめたのか。気になりますよね。**

実はこの時も
キーワード表示：仕事ができない
さらに、
キーワード表示：仕事にやりがいを持てない
というのがありました。
（■スライド：仕事ができない、仕事にやりがいを持てない）←赤背景に白文字で。

この時も自己嫌悪に悩みました。
何しろ、これまでボランティアの場では、いろいろなところに行って、いろいろな貢献をして、多くの人に感謝されました。また、われながらリーダーシップも発揮していたという自負がありました。
また、ここに来るまでのグループ会社での職場でも、いろいろ新しい企画を考え出して成功させ、実績も積み上げてきました。

それなのに、このNTTコミュニケーションズに来たら、
キーワード表示：仕事ができない人
（■スライド：仕事ができない人）
になってしまいました。俺って、企画力がないのか・・と悩みました。

それでも、何とかしなきゃと長時間残業したり、休日出勤とかしたけど思うように仕事が進まなくて無駄に時間を過ごした、というのが続いていました。
職場の床に寝転がって天上の蛍光灯を眺めた時もありました。

そんなある日、その日も休日出勤で誰もいない職場に一人でいた時に、**ある言葉がひらめきました。それは、**
キーワード表示：「私は私の発明で人を幸せにする。それが私の人生だ」
という言葉です。
（■スライド：「私は私の発明で人を幸せにする。それが私の人生だ」）

これを思いついたとたんに、涙があふれて床に落ちました。それほどの体験でした。【ヤマ場１】

そして、その時やっていた仕事を見てみると、まったくこの言葉の通りではありませんでした。
当時は技術部にいて、研究所で発明された技術をもとに商品を開発し、それを営業部に提供するのが仕事でした。ここで、扱っている技術が私の発明ではないというのもありましたが、それよりも問題だったのは、技術部では
キーワード表示：「お客様の喜ぶ顔が見えない」
（■スライド：お客様の喜ぶ顔が見えない）
ということでした。
お客様に直接接しているのは営業部の人で、技術部はお客様に直接接することがほとんどないのです。そこでは「人を幸せにしている」という実感が得られませんでした。

それで、NTTを辞め、転職をしました。いわゆる、
キーワード表示：「収入や肩書よりも、自分の言葉を大切にする」
（■スライド：収入や肩書よりも、自分の言葉を大切にする
でした。

●福祉ベンチャー企業
転職した先は、先ほど述べたように、仙台の福祉ベンチャー企業です。ここでは、テレビ

電話を通して聴覚障害者の人たちをサポートしています。
そのサポートサービスの一つが、いわゆる「代理電話」とか「電話リレー」と言われるサービスです。
（■スライド：代理電話の絵）

聴覚障害者の方は一般の音声電話を使うことはできません。そこで、手話通訳オペレーターにテレビ電話をかけて、手話で会話をしながら、手話通訳オペレーターが一般の音声電話をかける、というサービスです。
例えば、役所や企業への問い合わせとか、ラーメンの出前の注文とか、音声電話でしか受け付けていないところへすぐに連絡を取ることができるわけです。これまでは、連絡を取りたかったらそこへ出かけていたのが、家に居ながらできるようになったわけです。
このサービスは大変喜ばれました。

そして私にとって何より良かったのは、そのテレビ電話を通して、お客さんの喜ぶ顔が見られたことです。これはいいですよ。これはやりがいがありました。転職して良かったと思いました。

この他にも、このサービスで色々とン千万円の助成金を獲得したり、賞をもらったり、テレビにも出たりしました。ここでは自分の力を発揮できました。

つい先日まで自分の企画力の無さに自信喪失していたのがウソのようでした。
（■スライド：ビフォー（できない人、暗い顔）／アフター（お客様の笑顔と自分の笑顔）

ちょっとごく最近の話ですが、先日各家庭に配られた県の広報誌に、この「電話リレー」のことが掲載されていたのを見た時はとても嬉しかったです。20 年前、仙台でこれを広めようと一生懸命やっていたことが、こうして実を結んで埼玉にも普及してきたというのは感慨深いものがあります。
（■スライド：県央だよりと電話リレーサービスの写真）
自分がこういう社会の動きに関係する仕事をしていたんだというのも嬉しいです。

こうして先程の仙台の福祉ベンチャー企業で働いていましたが、5 年ぐらいしてある時、
思いつきました。それは、
キーワード表示：「自分は終末期の人のケアをしたい。身体ではなく、心のケアを」
ということです。

終末期に全身にチューブをめぐらされて機械につながれ、薬で意識もうろうとさせられながら一生を終えるのは幸せなのだろうか、と思いました。終末期のケアは身体的にはそうなってしまうかもしれないけれど、心のケアも必要なのではないか、と思いました。

ちょうどこのころ、母親が加齢性黄斑変性という目の中で出血する病気になって、仙台から実家の鴻巣に帰らなければならなくなりました。
それでこの会社を退職することにしました。

そして、東京の NPO 臨床パストラル教育研究センターというところにいきなり電話をして、働かせてもらうことにしました。
ここは、病気の人の話を聴いて心のケアをするカウンセラーを育成する NPO です。

ここでもいろいろなドラマがあったのですが、時間の関係で割愛します。
なお、その転職の間の期間を使って、１週間程度ですが、釜石で東日本大震災のボランティアを行ったりもしました。
（■スライド：震災ボランティアの写真）

第 3 幕　　サラリーマンを辞めました

（■スライド：第 3 幕　　サラリーマンを辞めました）

そんなある時、NHK のドキュメンタリー番組で、**たまたま**こんなのを観**ました。それは、**あるおじいさんの人生最後の夢を叶えさせてあげたという話です。

ところで、皆さんのなかに、おじいさんやおばあさんがいるって人、どのくらいいますか？あ、結構いますね。
そういう人は、自分のおじいさんやおばあさんを想像しながら聞いて下さいね。

その番組では、おじいさんはがんの終末期で入院していました。
（■スライド：病院のベッドにおじいさん）
何か月か先に孫娘の結婚式がありますが、それまでは余命が持たないだろうということでした。しかし、そのおじいさんのために、病院の看護師さんたちがボランティアで、病院内で孫娘さんの仮の結婚式をしたということでした。
（■スライド：病院のベッドと結婚式、看護師たち）

これを見て私は感動しました。それと同時に、このおじいさんの場合はこのような看護師さんたちがいたから人生最後の夢を実現できたけど、普通はできないだろう、と思いました。でも、周りにそのような人がいなくても夢は叶えたいのは誰でも同じだろうと思いました。
それならば、そのような夢をかなえるお手伝いをするサービス業があればいいんじゃないか、と思いました。そして、そのようなサービス業がなければ自分が作ろうか、と思いました。それがこの会社を作る元となりました。

49 歳の七夕の時に、ボランティア仲間で短冊を書くというイベントがあって、私は「人生の心残りを解消するサービスを提供する会社を創る」と書きました。その時はまだ何もなくて、ただこの**言葉**だけでした。
（■スライド：七夕写真　人生の心残りを解消するサービスを提供する会社を創る）

さらにこの歳に、メイク・ア・ウィッシュとの**出会い**もありました。
このメイク・ア・ウィッシュは、以前紹介したように、難病の子供の夢をかなえるお手伝いをしているボランティア団体です。
（■スライド：MAW、難病の子供、寄付・ボランティア）

この団体は、自分がやろうとしていたことを既に軌道に乗せてやっている、と思いました。難病の子供限定でとか、寄付やボランティアによる運営という風に、私がやろうとしている事とは多少の違いはありますが、しかし、夢をかなえるお手伝いということを何年も実際にやっているわけです。私もこれに倣おうと思いました。すでに成功しているところがあるというのは心強いものです。
（■スライド：MAW、難病の子供、寄付・ボランティア　自社、終末期患者（主に高齢者）、ビジネス（サービス事業））

それとこの頃、そろそろ 50 歳になろうとしたときに、あることを**思いつきました**。
キーワード表示：「人生１００年で前半はサラリーマン、後半は社長を体験しよう。1 粒で 2 度おいしい体験をしよう。そのために 50 歳で起業しよう。」
と思いました。
（■スライド：1 粒で 2 度おいしい（写真）　人生１００年の前半はサラリーマン、後半は社長）

「1 粒で 2 度おいしい」とは、あるアーモンド入りのキャラメルの宣伝ですが、私も人生で 2 つの味を体験しようと思いました。

この 49 歳という歳には、いろいろなことがありました。

●起業エピソード
50 歳になってから、当時勤めていた病院の理事長に、勤務形態について相談しました。
というのは、**たまたま**去年、一緒にボランティアをしていた人が亡くなり、その人の遺稿を本にしようか、という話が出ていたからです。亡くなった知人の自伝の出版をしたい、このような人の心残りを解消するお手伝いも仕事としてもやりたいので、今の仕事はパートのような形にさせてもらえないかと相談しました。
しかし理事長からは、フルで勤務するか、辞めるかどちらかだと言われました。
そして、母に、今の病院勤めを辞めて、自分で会社を作ろうと思っていると話しました。
そうしたら母は、
キーワード表示：「そういうのは私が死んでからにしておくれ」
と言われました。
（■スライド：そういうのは私が死んでからにしておくれ）般若の面

わたしはその時の母の迫力にビビッてしましました。【ヤマ場】
翌日理事長に平謝りして、まだ病院で働かせてもらうことにしました。
先程の知人の自伝は、自分の仕事としてではなく、ボランティアで出版しました。

ところで、起業を母に反対されたのですが、それから母を説得しようとはしませんでした。むしろ、母の人生をゆっくり聴くことにしました。
そんなこんなで、50 歳のおわりが近づいたころ、母親から
キーワード表示：「やっぱりお父さんの血が流れているんだね」
と言われました。
（■スライド：やっぱりお父さんの血が流れているんだね）

母のお父さん、私の祖父に当たるわけですが、祖父もやっぱりいろいろな仕事に手を出して、例えば北海道とか、いろいろなところに行っていて、幼いころの母はずいぶん寂しい思いをしていたようです。
母とそんな話もできて、私が起業するのを許してくれるようになりました。
そして今度こそ病院を退職して、５０歳が終わる一週間前に申請、設立することができました。
（■スライド：ビフォー／アフター？起業時の写真？）

第 4 幕　　現在の仕事

（■スライド：第 4 幕　　現在の仕事）

●起業した会社で
設立した会社は、「終末期等の人の心残りを解消するサービスの提供」を事業としています。まさに以前から作ろうと思っていた会社です。
（■スライド：コスモ・クリエイター・ジャパン株式会社のロゴ、名刺）

この会社はこれまでのボランティアの体験からできた会社とも言えます。これまでボランティアでやってきたことを、仕事としてできるようにした、ともいえるでしょう。
皆さんのお手元にある冊子に挟んでいるこのチラシ、これがわが社のことを説明したチラシです。こんな会社を作りました。
（■スライド：CCJ チラシ）

しかし、現実問題として、コンサルティング事業だけではやっていけない。そんなにいつもお客さんが来るわけじゃない。
それで、以前働いていたところの仕事を請け負ったり、アルバイトでプログラミング講師もやっています。
（■スライド：臨パ、民泊のトイレ掃除、TENTO プログラミング講師、・・・）

冊子に挟んでいるもう一つのチラシが、今アルバイトでやっているプログラミング教室のものです。こういうアルバイトをしています。
（■スライド：TENTO チラシ）

社長自らアルバイトしないといけない、というのが現実です。
でも、自分の会社なので、時間は自由です。それで、TOKYO2020 オリンピックのボランティアもやりました。
（■スライド：オリンピックボランティアの写真）

●「人生で出会った素敵な人」の冊子
（■スライド：冊子）

そうはいっても、本業を全くしていないというわけではありません。
この冊子は、最近仕事として作成しました。
ある 80 歳の女性の自伝です。
「人生で出会った素敵な人」というタイトルです。
この本は今年の 2 月に出来上がりました。
この方はその時入院していましたが、ご家族の話では、この本を手に取って大変喜んだとのことでした。
そしてその 2 週間後に、この方は亡くなりました。
ご遺族からも、間に合って良かった、と言っていただきました。
（■スライド：伊征子さん写真、葬儀の写真も？）

少し、この本のことについてお話しします。
この本の著者もまさに、いろいろな世界に自ら踏み込んで行って、そこで素敵な人と出会ったという生き方をしてきた素晴らしい人です。
（■スライド：素敵な人たちの写真コラージュ）

タイトルに「素敵な人」とありますが、これは見栄えのいい人、外見のかっこいい人というわけ**ではありません。**
ではどんな人か。
それは自分の強い信念持って生きている人、生きていた人**です**。世の中をより良くしていこうと貢献してきた人です。

この本の著者は、多くの人に、このような素敵な人がいることを知ってほしい、という想いでこの本を作りました。
マザーテレサとかサーロー節子さんとか、皆さんに知ってほしい。自然エネルギーや原発問題、核兵器問題のことも知ってほしい。そのことで頑張っている人たちがいることを知ってほしい、そういう想いがこもっています。
遺族の方はその遺志を受け継いでこの本をみんなに読んでもらおうと活動しています。

ちなみにこれはチャリティブックです。今回は皆さんに差し上げていますが、他の所では寄付をいただいてそれを活動資金にしたり、例えばウクライナ関係の平和のために寄付したりしているそうです。

皆さんにお願いしたいのはそういう金銭的な寄付ではなくて、これをきっかけに興味を持ってほしい、興味を持ったらさらに自分で調べてより多くのことを知ってほしいというこ

とです。（生徒の方を向いてそれぞれの目を見ながら、情熱をこめて言う）

皆さんはまだ実感がないかもしれませんが、皆さんが学ぶことは社会のためになります。皆さんは学ぶことですでに社会貢献をしていますよ。今の社会というよりは、10 年先、20 年先の未来の社会ですが。

この本の内容に興味があったら、私か、この著者が参加していた「ピースフルエナジー杉並」という団体に問い合わせしてみてください。巻末資料に連絡先があります。
（■スライド：ピースフルエナジー連絡先）

そういえば、最近このサーロー節子さんのノーベル平和賞受賞式でのスピーチが絵本になったというニュースがありました。（実際の絵本を見せる）
（■スライド：絵本）

今回作ったこの本にも、著者がそのノーベル平和賞受賞式に行った時の話が載っています。今まさに旬な話なので、興味を持ってもらったら嬉しいです。
（■スライド：冊子 p 48-49　見開き）

私としても、このような自分の力を発揮して、お客様に喜ばれる仕事ができて、大変嬉しいです。それが最近の社会の動きと関係しているというのも嬉しいです。やりがいを感じることができました。

●最後に
これまで、ＮＴＴに採用されてから今までの私の歩んできた道を紹介させてもらいました。

辞める、という表現をしていましたが、これは要は外の世界に出る、ということです。
ただ、それまでの世界を否定するのではなく、どっちも。自分の経験として。
二足のわらじ、多足のわらじとして。
これがわたしのお勧めです。

やはり、最初に思いついた「人生を自分で選択しながら生きていこう。」が人生を通して

ずっとあります。
そしてその上で、「私は私の発明で人を幸せにする。それが私の人生だ」という言葉が自分の進む方向性を決めました。
（■スライド：「人生を自分で選択・・」「私は私の発明で人を幸せにする。それが私の人生だ」）

おかげで、自分で自分の人生を創っているという実感を得られています。
他人が「これがいいよ」と言っていたからそうした、という人生だったら、この実感は得られなかったでしょう。

だから皆さんにも、これからの進路は自分で選択してほしいと思っています。
周囲の人の意見に従うのではなく、自分で決めてください。

また、仕方ないから、これなら安全だから、こうするのが当然だから、というので選択するのではなく、自分の中から湧き出てきた思いや言葉を大切にしてください。
（■スライド：仕方ないから... に大きな×印）

そしてその選択肢を増やすため、また、より良い選択をするためには、今いる世界だけで考えるのではなく、外の世界も知ってください。知るだけじゃなく、自分の足で歩んでみてください。いっぱいいっぱい体験してみてください。
（■スライド：「外の世界を知ろう。多足のわらじのすゝめ」）

そのうえで、自分で選択してみてください。
私はそれを勧めます。

（間）

・・・という私の言葉に従わ**なくてもいい**ですよ。
（■スライド：先程のスライドに大きな赤いバツ印）

「私は今いるこの世界で全力で生きるんだ！私には外の世界なんていらない！」というなら、それもまた一つの生き方です。それもまた良いでしょう。自分が選んだ道なら、どこに行きついても満足でしょう。

以上で、私の話を終わります。皆さん、聴いていただきありがとうございました。